

不定人称の日本語

—不定人称の言語化についての言語類型論的考察—

仁科陽江（広島大学）

ynishina@hiroshima-u. ac. jp

【要約】

本論では、日本語において不定人称がどのように言語化されているのかを探るため、ヨーロッパ言語において言語化されている不定人称代名詞の用法と機能を検証し、日本語との対照を通して、その構造的・機能的違いを考察する。具体例としてドイツ語の man を取り上げ、日本語に訳せないと言われている理由を探りつつ、その基本構造や不定の意味機能を観察し、日本語においてはむしろ人称を言語化しないことによって、別のしくみで不定人称が表現されていることを示す。

1. はじめに

日本語教育において、日本語で不定人称をどのように表すかについては明示的になされていないことがほとんどなのではないだろうか。印欧語族に属するヨーロッパ言語の多くは、(不)定冠詞で(不)定性を表したり、いわゆる不定人称代名詞を主語としたりする。ドイツ語不定人称代名詞 man については、ドイツ語の授業では日本語の受け身文に訳せばいいと教えられるそうだが¹。確かに一理あるが、しかしそれがいつもうまくいくわけではないことは、後述するように自明でもある。不定人称代名詞のある文を、日本語を母語とするドイツ語学習者が訳せないと言うのはなぜなのか。ドイツ語を母語とする日本語学習者がドイツ語で考えて日本語に置き換えると、たいていは不自然な日本語として産出される。これは、ヨーロッパ言語を母語とする日本語学習者に共通する問題であるとも考えられる。本論は学習者の母語と日本語との構造的な違いにスポットを当て、そこにある乖離を可視化し説明することを目的とする。そのような問題を、教師ばかりでなく学習者自身が意識することで、母語に対する気づきや日本語に対するより深い理解につなげるために、授業のデザインに応用する基礎研究として日本語教育に貢献することをめざす。

本論では、まず、不定人称が通言語的に共通する概念であり、形式的には個別言語によって様々であることを述べて、不定と定、特定と不特定、そして総称の分類を示す。次に、ヨーロッパ言語の不定人称の形式をいくつか例示し、その中からドイツ語の不定人称代名詞 man を用いた構文を日本語の訳文を吟味しつつ分析する。具体例としてドイツ語を扱うが、言語類型論的な観点から、不定人称がどのような機能をもつのかを考察する材料とし、不定人称の展開する機能的ネットワークを追う。その際、共通する不定の機能を持つ日本語と対照することによって、両言語の構造的な違いを示し、訳しにくいと言われる理由を探って説明を行う。

¹ 第二外国語のドイツ語を履修している学生たちとの p.c. (個人的交流) による。

2. 不定人称とは

まず、人称については、発話参与者、すなわち話し手と聞き手という発話行為の当事者と、それ以外の第三者という区別がある。後者は人や事物を指示する際に有生性や定性によってさらに分類することができる。それがどのように言語化されるか、あるいはされないかは、個別言語によって様々である。ヨーロッパ言語では文法カテゴリーとして、性・数・格などの変化を伴って統語的な一致を見るが、日本語では待遇表現など、別の原理によって区別することもあり得る。代名詞のような品詞や、動詞などに連なる接辞の形式も様々であり、聞き手を包括するか除外するかで異なる表現を持つ言語もある。

不定である(indefinite)とは、指示関係(reference)が同定不可であることをいうが、話者が特定の指示対象(referent)を指しているかどうかによって特定(indefinite, specific)と不特定(indefinite, unspecific)の下位分類が可能である。たとえばロシア語では、前者を *kto-to* (あそこに「だれか」いる)、後者を *kto-nibud'* (「だれか」手伝ってくれないだろうか) と、代名詞の形態によって区別する(斎藤 2010)。また、数量の不定も含めて総称的に(indefinite, generic)、一般化した指示対象を指すことも不定の一種である。

3. ヨーロッパ言語の不定人称代名詞

不定人称表現の一例として、*one* を「一人の人は」、*some* を「何人かの人は」と訳すといかにも直訳の不自然な日本語で、逐語訳で英文解釈の答を出す受験英語でさえ、*some* を主語とする文は「～する人もいる」と訳すように指南される。逆に日本語では、このような存在表現が不定を表すストラテジーなのだとも言える。英語の *There are people who...* のような存在文にある名詞も不定である。その他、*everyone* や *all* など、総称的に用いて不定人称を表現する形式をはじめ、いくつかのバリエーションがある。

不定人称は2人称の *you*、3人称複数の *they* などでも表される。*One* のような中立的な不定人称代名詞は、ドイツ語の *man*、フランス語の *on* などに相当し、いずれも文法的には3人称単数である。

次の例は、日本語の受け身文で訳されている。誰が「話す」のかは不特定である。

- (1) Au Québec, on parle français.
[場所+定]ケベック ON 話す[3. 単. 現. 直]フランス語
「ケベックではフランス語が話されます。」

現代フランス語の口語における不定人称代名詞 *on* は、ほぼ発話行為当事者を指示して用いられることが普通になっている。勧誘(adhortative)を表すには、スペイン語で *vamos*、イタリア語で *andiamo* と、動詞の1人称複数形直説法現在を用いるが、フランス語では、*on y va* と、*on* を主語とする文が定型表現となっている。*On* はつまり1人称複数を表す人称代名詞 *nous* の代用というわけであるが、下記の例(2)と(3)のように、*on* が聞き手を含む1人称複数包括形、*nous* が1人称複数除外形と使い分けるといった一種の文法化が起こっている²。不定人称代名詞が常に定(definite)である発話行為当事

² 「東京外国語大学言語モジュール」では、*on* は *nous* よりも仲間意識が前面に現れた「私たち」を表すと

者を指すという現象は、ドイツ語の用法にも語用論的に定着している。が、フランス語ほど文法化していないことも後に述べる。下記の例文で、聞き手を包括するか除外するかを日本語の終助詞で表したのは筆者の工夫で、聞き手と情報を共有しているかしていないかの違いを表現するストラテジーとして示した。

(2) On vient souvent ici.
ON 来る[3単.現.直] よく ここ
「私たちはここによく来ますね。」(包括)

(3) Nous venons souvent ici.
[1複] 来る[1複.現.直] よく ここ
「私たちはここによく来ますよ。」(除外)

ドイツ語の不定人称代名詞 *man* は、比較的使用頻度は高いが、形態としてはむしろ特殊である。文法パラダイムは欠損しており、数や格による屈折をおこなわないので複数形も所有格も存在しない。主格のみ存在し、与格 *einem* と対格 *einen* は異なる語根の補充形 (*suppletive*) である。正書法においても、ドイツ語では名詞を大文字で始めるが、同じ発音の *Mann* 「男」と区別して *man* と小文字で書くのが特徴的である。英語で *Man is mortal* というときの *man* は、いわゆる *generic masculine*、一般的な人称の意味で男性を表す名詞を用いるのであるが、ドイツ語では、普通名詞とは形態統語論的な区別があり、不定人称代名詞としての *man* に対して男性単数の人称代名詞 *er* で照応を表すこともしない。昨今ではジェンダー平等の意識から、「女」を表す名詞 *Frau* を小文字にして *frau* とし、*man* ではない不定人称代名詞として使用するという動きもあるけれども、文法規範としては定着していない。

4. ドイツ語の *man* の例文分析

独和辞典の中で *man* を含む全用例 194 例を抽出し³、掲載されている日本語表現と比較したところ、両言語の基本的な構造がかなり異なっていることが目立つ。辞書に掲載されている例は、いずれも典型的なドイツ語表現であり、使用頻度も高いと思われる。訳文はこなれた自然な日本語で、訳しにくい *man* の扱いに様々な工夫がみられる。日本語では受け身にすれば良い、と言われることを上記で述べたが、194 例のなかで受け身の日本語になっていたのは 30 例だけであった。(1) のフランス語のような例の他、次のように、ドイツ語ではいずれも *man* を主語とする能動文が、受け身に訳されている。

(4) *Man begrub diesen berühmten Dichter in München.*
MAN 埋葬する[3単.過.直][近.3単.男.対]有名な 詩人 [場所]ミュンヘン
「この有名な詩人はミュンヘンに埋葬された。」

説明している。http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/fr/gmod/contents/explanation/031.html (2021年12月31日閲覧)

³ アクセス独和辞典の辞書データは小松未奈美氏より提供を受けた。本論文では、煩雑化を避けるため屈折辞などの拘束形態素をセグメント化していないが、文法機能は[]内にグロスをつけ、短縮したグロスのリストを付けている。日本語訳は辞書の訳をそのまま使用した。筆者の作例の場合は、これも典型的な、使用頻度の多い表現を扱った。

(5) Sie konnte nicht ins Haus, man hatte sie ausgeschlossen.
 [3 単. 女. 主][可能. 3 単. 過. 直][否定][場所+定. 中. 単. 対]家, MAN[完了. 3 単. 過. 直][3 単. 女. 対] 締め出す[過分]
 「彼女は家に入れなかった、カギを掛けられてしまったのだ。」

(4)の詩人を埋葬した人は実際にある特定の人であろうが、ここでは誰であろうが関心はない。(5)においてカギをかけた動作主についても同様である。日本語では動作主が問題にならない時に受け身にするという文法記述で教えられることが多いが⁴、ここで注目に値するのは、受け身にすることで、動作主の項は必須項ではなくなるということである。また、(5)においてはトピック化された「彼女」が同じ統語機能を持つことで省略されている。トピック項を降格させてまで主語を転換することは日本語では選好しない (Givon 1983, Nishina 2022)。このトピック項の階層はエンパシー階層や指示性の階層 (Kuno & Kaburaki 1977, Croft 1990) とともに共通するもので、日本語に顕著に見られる原則である。すなわち、「詩人」という普通名詞よりも、「彼女」という代名詞よりも、また、「この詩人」という特定の指示対象よりも、不定人称は本来階層の低い位置にあり、ここでは受け身構文にすることによって必須項ではなくなっている。

それではなぜドイツ語でも受動態にしないのか、という疑問も生まれようし、実際、ドイツ語で受動態にできる場合も多いが、それは受動態の形態統語論的な有標性よりも能動態の無標性が選好されることが一因であろう。人は負担の少ない話し方をする志向があり、ドイツ語方言ではほぼ受動態を用いず、南ドイツ方言では、3人称複数を主語として不定人称に用いることもある。

(6) Man hat eine große Brücke gebaut.
 MAN [完了. 3 単. 現. 直][不定. 女. 対] 大きい 橋 建てる[過分]
 (7) Sie haben eine große Brücke gebaut. (南ドイツ方言)
 [3 複. 主] [完了. 3 複. 現. 直][不定. 女. 対] 大きい 橋 建てる[過分]
 「大きな橋が建てられた。」

エンパシー階層の観点からは、受け身ばかりでなく、次の例でも日本語構造を説明することができる。ドイツ語の文では、階層の高い位置を占める1人称が、主格の不定代名詞 man よりも低い与格という統語機能をもっているが、日本語では、ドイツ語の動詞「与える」を受容動詞「得る」に言い換えることによって、1人称の統語機能を高くして話者の視点を保っている。

(8) Man gab mir die Erlaubnis, sofort nach Haus zu gehen.
 MAN 与える[3 単. 過. 直][1 単. 与][定. 単. 女. 対]許可 すぐに [方向]家[不定詞]行く
 「私はすぐに帰宅する許可を得た。」

また、Man を含む文には可能や義務のモダリティを表す話法の助動詞の出現が多い (84 例)。

⁴ たとえば (白川・庵ほか 2001)

(9) Man kann sich in der Bibliothek Bücher leihen.
 MAN[可能. 3 単. 現. 直] [再][場所][定. 単. 女. 与] 図書館 本[複数] 借りる[不定詞]
 「図書館の本が借りだせる。」

(10) Man kann zwischen drei Möglichkeiten wählen.
 MAN [可能. 3 単. 現. 直] 間 3 つ 可能性 選ぶ[不定詞]
 「三つの可能性のどれかを選ぶことができる。」

ドイツ語の助動詞は三人称単数の主語である man と文法的一致をみる。(9)のような他動詞文であっても、日本語で可能を表す文は自動詞文となる。ここでは可能動詞を用いているので、leihen「借りる」の目的語 Bücher「本」が、日本語自動詞文では主格を表す助詞「が」に交替している。(10)のような可能を表す構文は、「ことができる」をモダリティの助動詞に文法化されたものとして日本語教育で扱われることが多いが、基本構造は「こと」で名詞句化された主語と、動詞「できる」を述語とする自動詞文である。自動詞文のもつ唯一の必須項は命題を表す成分であり、それを名詞句化することで、日本語で可能を表すすべての文は自動詞文となる。すなわち、動詞の結合価によって、人称の文法項の入り込む余地はない。もし特定の人称指示がある場合には、「私(に)は」など、主題化した付加語として加えられるだけであるので、そこが、man に代わって文法項としての主語になるドイツ語とは異なる。

そのような自動詞文の構造は、知覚動詞の場合にもあてはまる。日本語の「見える」「聞こえる」は知覚対象である刺激(stimulus)を必須項とする自動詞であり、意志を持たない知覚者が付加語でしかない点で、ドイツ語の知覚者を主語とする他動詞構文と異なる。以下の例では、知覚対象の Turm「塔」は他動詞 sehen「見る」の目的語である。英語にも see, look, watch など「見る」を表す動詞は複数あるが、ドイツ語では加えて動詞の前綴りのバリエーションもあり、不定代名詞 man との組み合わせによって様々に意味の違いがあることが日本語との対照を通してよくわかる。

(11) Den Turm sieht man schon von fern.
 [定. 単. 男. 対]塔 見る[3 単. 現. 直] MAN もう [奪]遠い
 「その塔は遠くからでも見える。」

可能や知覚に限らず、他動性の低い場合に、日本語は自動詞表現を好む傾向が強い(角田 2017)。Brauchen という動詞は、「必要とする」時間を目的語に取る他動詞ではあるが、意図性はなく、対象に対する働きかけはなく、非完結的で、変化もない、など、他動性の高さを測るパラメーターの多くに該当しない(Hopper & Thompson 1980)。日本語構造と比べられたい。

(12) Bis Hannover braucht man mit dem Auto eine gute Stunde.
 まで ハノーファー 必要とする[3 単. 現. 直]MAN[具][定: 単. 中. 与]車[不定: 単. 女. 対]良い 時間
 「ハノーファーまで車でたっぷり 1 時間はかかる。」

次の例のような話法の助動詞 müssen(muss は活用形)は、義務を表す。日本語は命題を条件節で表す

複文構造が文法化した形態をとるが、人称表現はなく、原理としては可能を表す自動詞文と同様である。

- (13) Bei Nebel muss man langsam fahren.
 [時]霧 [義務. 3 単. 現. 直]MAN ゆっくり 運転する [不定詞]
 「霧の時にはゆっくり運転しなければならない。」

たとえ話法の助動詞がなくても、モダリティの解釈が自然なものも多い。(14)は助動詞がなく(15)は許可を表す助動詞があつて、ともに否定文である。

- (14) So etwas tut man nicht.
 そんな 何か する [3 単. 現. 直] MAN [否定]
 「そんなことをするものではない。」

- (15) So etwas darf man nicht sagen.
 そんな 何か [許可. 3 単. 現. 直] MAN [否定] 言う [不定詞]
 「そんなことは言うべきではない。」

「ものではない」といった義務的(deontic)な解釈が可能な表現は、話法の助動詞を用いた場合と同様、不定代名詞で表すことによる一般性を反映している。不定代名詞が、その不定さゆえに総称的に人一般を指すとしても、実際には、霧の時でもゆっくり運転しない人や、すべきでないことをしたり、言うべきでないことを言ったりする人もいるわけである。そうであれば、ここでの一般的な人というのは、いわば、まともな人、常識を弁えた人、ということになる。ということは、一般的な人を指すという不定人称の総称機能は、一種の規範、だれもが遵守すべき行動規範を示すことになる。それが義務のモダリティを含意するしくみと言えるのではないか。ことわざや箴言が man を主語としやすい(8例)ことも、一般化や規範を表現する不定人称の特徴の表れといえるだろう。

不定性の総称機能が義務のモダリティを含意することは、man と願望法(optative)との相性が良いことにもあらわれる。願望法というのは、三人称に対する命令法に匹敵し、形式的には接続法を用いる。(16)は薬の処方箋、(17)は料理のレシピなど、特定のジャンルに用いられやすいことも特徴的である。これは不特定の相手に対して何かをしてほしいという願望形式によって、教示・指示する(order)表現であり、命令・義務に準ずる機能を持つ。

- (16) Man nehme täglich zwei Tabletten.
 MAN とる [3 単. 接. 現] 毎日 2 錠剤
 「1 日 2 錠服用のこと」

- (17) Man nehme zwei Esslöffel Essig.
 MAN とる [3 単. 接. 現] 2 大さじ 酢
 「お酢を大さじ 2 杯入れる」

最後に、不定であるはずの人称代名詞が、語用論的含意によって、定性を表す場合について述べる。このような例については当該の辞典に用例がなかったが、(18)のような発話は日常よく聞くものである。文字通りにとれば、人が窓を開けることが可能か不可能か、つまり窓が開くかどうかといった疑問文であるが、話者が窓を開けたい場合は許可求めとなり、話者が相手に開けてほしい場合は依頼の含意を持つ。すなわち、前者の場合に発話者が意図する man の指示対象(referent)は話し手であり、後者の場合は聞き手である。もちろん、それぞれ1人称や2人称の代名詞を用いてもよいが、このような発話行為では、不定人称代名詞が本来特定の指示性を持たないことから人稱指示を避けることができ、直接的な要求を和らげる効果もあろう。その意味では(18)の日本語訳は様々に変わり得る。

- (18) Kann man das Fenster öffnen?
 [可能. 3 単. 接. 現] MAN [定. 単. 中. 対] 窓 開ける [不定詞]
 「窓が開きますか。」「窓を開けてもいいですか。」「窓を開けてくれませんか。」

不定人称代名詞の不定性によってこのような語用論的推論ができる。そのことが以下のように、皮肉やほのめかしとして機能することも可能にする。

- (19) Man ist ja schließlich nicht immer zu Hause.
 MAN [存在. 3 単. 現. 直] [小] 結局 [否定] いつも [場所] 家
 「いつも家にいるわけではないからね。」

この例で、家にいる人、といえば限られており、誰のことを言っているかは明らかである。日本語においても、「だれかさん」とか「どこかのだれかさん」といった不定表現を用いて、実はある特定の人を指す、というのと通じる用法である。

5. 不定人稱の機能と表現

前節の観察からわかったことをまとめると、まず、ドイツ語不定人稱代名詞 man において、不定人稱の形式として持ちうる定性の表現機能の全てを確認できた。話者が指示対象を特定できないもの、話者しか特定できないもの、話者も聞き手も特定できる定の用法もあった。そして、不定の総称的な意味からは、可能や、規範としての義務のモダリティが含意される。不定代名詞によって人稱指示を明示することを避けたり、あるいは明示したいことをほのめかしたりする機能にも派生していき、不定人稱の機能的ネットワークが形成されることがわかった。

そして、日本語では、不定人稱の言語化が、ドイツ語のような代名詞としては不要であることも検証した。そこでは、ドイツ語と日本語の構造上の基本的な違いが浮き彫りになった。ドイツ語を日本語に訳せない、あるいは訳さなくて良いのは、日本語は省略できるからだとか、日本語は曖昧だからだとか根拠もなく言われることが多いが、単純にそういうことではない。ドイツ語をはじめ、ヨーロッパ言語のように、主語という概念が確立している言語では、文法的に不定人稱の言語化を必須とする。が、それがどのような意味を表すのかということは、日本語の対照によって示すことができる。「ものだ」のような文末表現に対応するものはドイツ語の文にはないが、それこそが不定人稱を反映した

日本語表現である。日本語では人称を言語化しないこと自体に積極的な意味があると言っても良い。それはたとえば、行為者の項をなくすというヴォイスのカテゴリーにおけるオペレーションや、可能や知覚を表す文や他動性の低い文が、自動詞文になるところに見られる。また、エンパシー階層の高い人称が統語機能を決めるので、自ずと発話の視点が不定人称からはずれている。このような統語構造自体の違いが、ドイツ語の不定人称代名詞が日本語に対応しないと言われる理由の一つであることは確かで、日本語においては別のしくみで不定人称を表現することを可能にしているということがわかる。

6. おわりに

日本語は、ドイツ語をはじめとするヨーロッパの言語とは、その構造や類型論的特徴が大きく異なることがあり、いずれかの言語を母語とする学習者がその違いに直面することは多々あることだろうと容易に推察できる。今回はそこまで扱わなかったが、辞書の例では「人がリンゴを美味しく食べる」とでも直訳できるドイツ語を「りんごがおいしい」と訳してあったりする。同じ不定人称でも、「誰かがノックする」というふうに、人の行為を表す代わりに、「ノックする音が聞こえる」という状況を表すほうが日本語として自然だったりする。日本語の特徴を象徴的に類型化して、「する」と「なる」⁵や、「点」と「線」⁶の二元論などが論じられることがあるが、日本語における事態の把握の仕方、それを言語化する仕方の特徴が、他言語との対照によって見えてくる。日本語教育の現場において、そのような違いをぜひ自分たちで見つけて議論していただきたい。文法のルールばかりを並べたおしきせの文法教育でなく、それぞれの言語文化において、類型論的な異なりに違和感や難しさを覚えた時こそ、学習者自身によって考え、発見し、納得できる機会がもてるように、学習者による課題探究型の日本語学習の可能性を期待したい。本論がそのための一助になれば幸いである。

グロス（短縮したもののみ）

3	3人称
単	単数
複	複数
現	現在
過	過去
直	直説法
接	接続法
小	小詞
過分	過去分詞
男	男性
女	女性
中	中性

⁵ 池上 1981

⁶ 影山 2021

主	主格
対	対格
奪	奪格
具	道具格
近	指示代名詞近称
定	定冠詞
不定	不定冠詞
再	再帰代名詞

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学 言語類型から見た日本語の本質』くろしお出版
- 斎藤純男 (2010) 『言語学入門』三省堂
- 白川博之・庵功雄ほか (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 角田太作 (2017) 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』くろしお出版.
- 在間進編 (2010) 『アクセス独和辞典第3版』三修社
- Croft, W. (1990) *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kuno, S. & Kaburaki, E. (1977) *Empathy and Syntax*, *Linguistic Inquiry*, vol.8, No.4, 627-672.
- Lyons, J. (1983) *Semantik: Band II*. München: C.H.Beck.
- Givón, T. (1983) *Topic continuity in discourse: An introduction*. In T. Givón (ed.), *Topic continuity in discourse*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. pp. 1-41.
- Hopper, P. J. & Thompson, S. A. (1980) *Transitivity in Grammar and Discourse*. *Language*, 56/2, 251-99
- Nishina, Y. (2022) *Passivorientierung und Passivvariation im Chinesischen, Japanischen und Deutschen*. In *Japanische Gesellschaft für Germanistik* (ed.), *Linguisten-Seminar Forum Japanisch-Germanistischer Sprachforschung, Band 4*. München: Iudicium. pp. 56-76.